

誤らず、この軍団の長としての高水会長をかかえている。この名コンビ！
私日、日露大戦の大山司令官と、児玉参謀のおの名組合せもいづれも連想している。

「佐伯史談会」なる大軍西遷の源は、どうやらこの辺にありそうである。四百とも五百とも拵がったこの大崩の粟のゆるぐことなきよう、益々、西氏のご健勝を祈り、そしてご健闘、お手引を乞い願って止まない次第である。

(おわり)

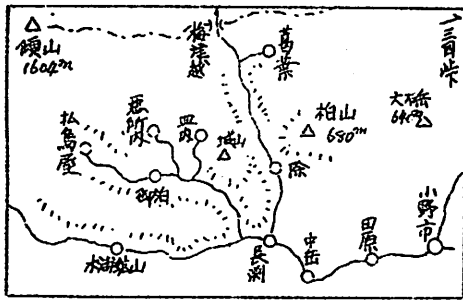
見聞記

宇目町西山地区を歩いて 井柴 弘

宇目町での文化財関係の集会のついでに、小野市に宿泊。翌十二月一日、多年希望の西山を歩いた。それは全く軸丸氏のご厚意と、その運転をさせる車に甘えながらのことであつた。

九時半すぎ、車は長瀬から川に沿うて、半ば鎧装された林道を入る。南田原三重線の具道である。除の部落から先は、次第に谷川が低くなる。いや急勾配となり、視界はぐっと広がる。

さすがに大分県随一の大きな山林資源と擁する宇目町、目の届く限り山また山、その悉くが



十ラヤの又ギの黄葉、多少の濃淡清濁で色どり賑やか、それがよく手入れの行届いた濃緑の杉の美観を懸念して、それが路傍から谷向う、その先重なる山々四方悉くである。このような景観、黄葉の展望は生れはじめたことであつた。

道は右手樹林の中に入り、谷間にくぐりて数戸の農家があつた。葛葉という部落で、数年前の「宇目町地図」では十数戸が数えられたが、今は現住四戸、豪華な空屋と草葺の寮屋が一軒づつ目についただけ。全く山村過疎の姿である。

しかし車を駐めた首藤家の老主人は、軸丸氏と旧知の副板、快く迎えてくれ、家の横から裏の谷岩にかけて、何百鉢かの盆栽の手入れの話をきく。納屋をのぞいて見たらこの秋活躍したコンバインが、カバリーの下に休んでいる。いざれにしても二、三反しか作らないであろうに、軒先には電燈線の外電線もあり、テレビ受像の黒い太いコードも引かれていた。有るほどと私は感心した。

ここまで来ると、軸丸氏に車を梅津越の峠まで走らせる。向うは三重所の奥、稲積鐘乳洞が近い。それから一旦長瀬まで下り、西山川に沿うて西山の中心地帯に入った。そして御治、松島屋とめぐり、下って大瀬原から悪所内と、城山に近い四反との境だった。

- 以上数部落をめぐって、共通していえることは、
 - ほんの手の届く距離の谷間、しかし海拔三、四百メートル
 - わず水田を潤き、傾斜地ながら畑作に励んでいる。
 - 林業(椎茸・造林・山林労働)に働いている。
 - 氏神をまつっている(山神社、天満社が多い)
 - 電燈はもとより、電話・テレビの恩恵は下界並み。
 - 車などの部落にも何台がある。道路はよい。
- 午後、真弓から鷹島神社へとまわった。